

## ぎふクリーン農業の推進に向けた研究開発 (環境部)

「ぎふクリーン農業」の栽培面積は1万haを超え、全面積の約20%を占めるまでに普及していますが、新たな害虫の発生や農薬が効きにくくなる抵抗性の発現などにより、対応に非常に苦慮している事例が見られます。

農業技術センターでは、今年度から関連する2テーマに取り組んでいますので、紹介します。

### 1 農薬飛散、省力に配慮したカキの先進的防除体系

岐阜県のカキは大型散布機による防除が主体となっていますが、農薬飛散（ドリフト）問題や高齢化対策として、農薬の飛散防止や防除作業の省力化が望まれています。また、農薬使用量の減少に伴って、フタモンマダラメイガなど樹幹害虫の被害が増加しています。

この対策として、①農閑期に実施でき防除機械を使わない「薬剤の樹幹処理技術」、②「性フェロモン剤」の組み合わせや発生予察による農薬削減技術、③樹幹害虫を長期間効率的に防除できる「高濃度少量散布技術」を主体とする防除体系の開発に取り組めます。

生産者や農業改良普及センターと連携しながら、作業の省力化や農薬飛散防止対策とともに、「ぎふクリーン農業50」の推進を目指して研究を進めていきます。



**薬剤の樹幹処理**  
農閑期に防除作業ができます



**性フェロモンによる交信かく乱**  
農薬飛散がなく防除回数を減らせます



**高濃度少量散布**  
軽作業で樹幹害虫の長期防除ができます

### 2 主要害虫の殺虫剤抵抗性の検定

近年、殺虫剤の効果が悪くなったのではないかとの懸念が現場で起きています。また、他県でも殺虫剤の連用による抵抗性の発現例が報告されています。

そこで、薬剤感受性の低下が疑われる県内の主要害虫について、現場で使用されている殺虫剤を中心に抵抗性を検定し、防除体系の見直しを進めていきます。

平成21年度は、農業改良普及センター・農業技術課の協力を得ながら、ミナミキイロアザミウマ（キュウリ）、キスジノハムシ（ダイコン）、ハダニ（ナシ）等を対象に実施しています。



直接散布法による農薬抵抗性の検定

## 水稻新品種「ハツシモ岐阜SL」の普及に向けて (作物部)

平成22年度に「ハツシモ」から一斉切り替えが予定されている新品種「ハツシモ岐阜SL」については、県下各地で生産者を対象とした研修会が開催され、栽培特性などをご理解いただいているところです。

研修会では現地視察や食味試験を通して、「ハツシモ岐阜SL」の縞葉枯病抵抗性や「ハツシモ」と遜色のない食味を実感していただきました。

また、県ではPR用パンフレットを生産者に配布するなど一斉切り替えの周知を図っています。

なお、ヒメトビウンカが多発生を受けて6月に発生予察注意報が発表される中、縞葉枯病抵抗性が特徴である「ハツシモ岐阜SL」では、縞葉枯病の発生は全く見られておりません。



縞葉枯病抵抗性の比較 7/31撮影

左:ハツシモ岐阜SL、右:ハツシモ  
赤丸内が発病した葉。緑色が薄くなっている。

## トマト独立ポット耕栽培を商標登録 (野菜果樹部)



当センターで開発しましたトマトの新しい養液栽培システム「独立ポット耕栽培」を「ポットファーム」として商標登録しました。

独立ポット耕栽培は、土壌病害を抑制し、作業姿勢の改善、高収量が期待できるシステムで、県内では65aに導入されています。

現在、兼弥産業株式会社に商標の使用を許諾しており、トマト独立ポット耕栽培は、兼弥産業株式会社から「ポットファーム」として全国に販売され始めました。

## 岐阜農林高校生徒インターンシップ(就業体験)受け入れ

岐阜農林高校生徒のインターンシップ受け入れを、7月27日～31日、8月3日～7日の2週間、それぞれ6名ずつ行いました。作物・花・野菜・果樹・環境分野で各1日ずつ研修していただきました。生物工学科で現場実習が少ないこともあって、農作業に戸惑う姿もみられましたが、各自疑問に思ったことを積極的に質問していました。

今後、岐阜大学応用生物科学部等からの受け入れも予定しています。



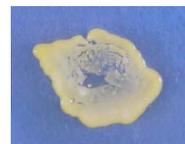
ミニバラの芽かき・施肥作業

## トマトの青枯病とかいよう病が簡易に判別できます (環境部)

夏季高温期になるとトマトの枯死が目立つようになりますが、青枯病とかいよう病が主に関係しています。その原因解明の一手法として、病原菌の簡易な判別法があります。専用培地に茎の断面を付けるだけで、常温・10日程度で判別できます。培地は環境部で提供しますので、お問い合わせください。



専用培地(上)とコロニー(右)



かいよう病

青枯病

